

---

# 夏の日の友情

日向 まりな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の日の友情

### 【Nコード】

N3896A

### 【作者名】

日向 まりな

### 【あらすじ】

中学生の仲良し6人組の、ほのぼのストーリー。6人の身に起こる、中学生の小さな出来事と、彼らの大きな挑戦のお話です！！

## 武の章1：第一話

まだ春だというのに、ひどく暑い日だった。

僕たちは、入院している武「タケル」のお見舞いに行くことになった。

僕が今いるのは、沖縄では定番のアイス、ブルーシールの店の前だ。いつもの二人と約束をしているのだ。

「おまたせ！弘樹「ヒロキ」、ずいぶん早く来たんだね！」

おさがりの自転車にのった直「ナオ」が言った。

「洋助「ヨウスケ」はまだ？」

僕が言った。

その時、向こうからジュースを持った洋助がやってきた。

「待った？」

「1時間くらい」

「嘘つけ」

いつもはこのあとに武が

「その通り」

という。

「行こっか」

どこかに違和感を感じながら、僕が言った。

みんな同じ気持ちだったようで、黙ったまま自転車で走りだした。

病院につくと、もう慣れた感じで武の病室に向かった。

「また来てくれたの？」

「武がいないとつまんないから。」

僕が言った。

武はうれしそうだった。

すると、直が言った。

「それにしてもさあ、武も運悪いよなあ」

続いて洋助が言う。

「家の手伝いしてたら、腕切っちゃうなんかなあ」

武の家では、さとうきびを育てている。

その手伝いをしている時、お母さんに腕を切られたそうだった。

武が話をかえた。

「かずはいつか来てくれるかなあ」

「武は和人「カズト」の話ばかりだね」

直が言った。和人は、僕たちの街では有名な、いわゆる不良だった。

とは言ってもこんな田舎だけだね。

「そつえば、そろそろ武の誕生日じゃん」

洋助が言った。

続いて武が言う。

「うん。でも誕生日までに、退院は無理だつて。」

武が悲しそうな顔をしたのを、僕は見た。

武の家では大切な一人息子のために、毎年盛大にパーティをやるのだ。

でも、今年は無理なようだった。

武の気持ちが通じたのか、直が言った。

「大丈夫！今年は俺たちがいつもよりでっかいプレゼントあげるからさ」

洋助が続く。

「ほしいもの、なんでも言って」

武はとてうれしそうな顔をした。僕は言った。

「なにがほしい？」

武がいう。

「ほしいものなんか、特にないよ。ほしかったらとくに親に買ってもらってるし」

でも、僕たちは分かってたんだ。  
武のほしいものは、お金で買えないものなんだって。

## 武の章1：第二話

僕たちは病院をでると、公園に行った。  
この公園は僕たちの活動の中心なんだ。  
僕たちはベンチに座って、武へのプレゼントについて相談をはじめた。

「俺さ、武はやっぱ和人に会いたいんじゃないかと思うんだ」

直が言った。

僕も直と同じことを考えていた。  
僕が言う。

「そうだね。和人に相談してみようよ」

そこでみんなは言葉につまってしまった。  
和人といえば、今は登校拒否をしていて、変な奴らと手を組んだとかいう噂があるからだ。  
洋助が言う。

「誰が和人に頼む？」

「亮太「リョウタ」に頼んでもらったらどうかな」

僕が言った。

亮太は、洋助の弟だ。

和人は洋助と喧嘩して以来、信じている人は亮太だけだと言っている。

目を輝かせて直が言う。

「じゃあ、今から亮太に頼みに行こうぜ！」

僕たちは自転車に飛びのった。

やっぱり親友の誕生日だもん。

みんな真剣なのは当たり前だよな。

僕たちは洋助を先頭に、亮太のところへ行った。

亮太は、家でテレビをみているところだった。

僕たちが洋助のお母さんにあいさつをし、亮太の前にいくと、亮太はうざそうな顔をした。

「先輩たち、俺になんか用っすか？」

「実は、亮太に頼みたいことがあって…」

直が切り出した瞬間、インターホンが鳴った。

「和先輩だ！」

亮太は急いで玄関に向かった。

僕たちは突然の和人の訪問に、ただ啞然としていた。

やっかいなことに、直接頼むしかなさそうだ。



### 武の章1：第三話

「俺になんの用？」

亮太と話していたときとは打って変わって、冷たい口調で和人が言った。

僕たちはさっきから、緊張のあまり、正座で和人と亮太の会話を聞いていた。

突然話し掛けられたので、三人ともひるんで声がでなかった。少し遅れて、洋助がゆっくり言った。

「和人に頼みがあるんだ」

「洋助、俺にあんなこと言っというて、よく頼みなんか言いにこれるよな」

いやみな笑いを浮かべて、和人が言った。

和人が登校拒否になったのは、洋助のせいだという噂は本当だったようだ。

一年前までは、笑顔がかわいい普通の中学生だった和人が、ここまです変わるには僕たちも想像さえしていなかった。

「武のことなんだけど」

僕は勇気をだした。

でも、きつと声は震えていただろう。

そんな僕を見て、直が説明をはじめた。

「実は武が入院したんだ。それで、武は和人に会いたいみたいで…」

そこで和人の顔色が変わった。

確かに武は和人にたいしてしつこかった。

でも、和人はそんな武のことを受け入れていた。

小学生のときは、学校一の仲良しコンビだと言われていたこともあった。

和人は変わったとは言っても、武のことが気掛かりだったのだろう。

「武は大丈夫なのかよ」

冷静を装っていたが、和人の顔は焦りでいっぱいだった。

「大丈夫。大事には至ってないよ。でも、和人には会ってもらいたいんだ」

僕は祈るように言った。

きっと、ほかのみんなも同じ気持ちだったと思う。

和人が僕の顔を見た。

同時に金色の髪がさわやかに動く。

僕は緊張した。

「分かった。しょうがねえやつらだな」

僕たちは抱き合って喜んだ。

和人は苦笑いを浮かべていた。

武の一番願っていたことを、僕たちが叶えてやれるんだ。すごいことだね、これって。

## 武の章1：第四話

今日は武の誕生日。

僕たちは病院の前で、和人を待っていた。

「和人来てくれるかなあ」

直が言った。

その時、爆音をたてて二人乗りのバイクが来た。

前には高校生らしきリーゼントの男が、うしろにはさらさらの金髪  
… 和人がのっていた。

「サンキュー。またよろしくな」

「ああ」

そついうとリーゼントの男はまた爆音をたてて行ってしまった。

「またせたな」

和人の迫力に、三人ともビックリしていた。  
直が言う。

「来てくれないかと思ったよ」

和人は笑った。

「約束はちゃんと守る主義でね」

僕は笑顔をつくって言った。

「武の病室に行こう」

病室につくと、武はうれしそうな顔をした。  
和人はドアの後ろに隠れている。

「誕生日おめでとう」

僕たちは声をそろえていった。  
武は照れ臭そうに笑っていた。  
洋助が言った。

「今日はおつかひのプレゼントを持ってきたんだ。弘樹、連れてきて」

僕はドアの後ろにいる、和人の手を引いた。  
和人の整った顔が緊張と照れ臭さで笑った。

「和人！！」

武は叫んだ。

「武、おめでとう」

和人は苦笑いのまま言った。

武の大きな目には、薄く涙の膜がはっている。

「みんな、ありがとう」

武の言葉を聞いて、直が言った。

「二人っきりで話しなよ。僕たちは外にいるから。和人、終わったから電話くれよ」

和人はうなずいた。

洋助は自分のかばんを、武のベッドの下に押し込んだ。

僕たちはこれから武が和人に言う言葉を、だいたい予想していた。だから洋助は、僕の携帯と通話中になったままの自分の携帯が入ったかばんを、ベッドの下に入れたんだ。

## 武の章1：第五話

僕たちは急いで公園に行った。  
ベンチに座ると、二人が集まってきた。

「弘樹、早くしろよ」

「うん」

僕は携帯をだして、耳にあてた。

洋助と直も耳を近付けてきた。

すると、和人のはしゃぐような声が聞こえてきた。

『武と久しぶりに話せて俺うれしいよ』

「和人、全然変わってないじゃん」

洋助が言った。

確かにさっきまで不良だった和人が、昔に戻っていた。

『まさか和人が来てくれるなんて、思ってたかったよ』

武の高い、おもちゃのような声が聞こえた。

『それで僕、和人に言いたいことがあるんだ』

直が笑った。

「武、言うつもりだよ」

僕たちは耳を澄ました。

『和人には嫌われるかもしれない。でも、言いたいんだ』

『なんだよ、改まっちゃって』

和人は、わざとおどけたようだった。

武が深呼吸する音が聞こえた。

『僕、前から和人のことが好きだったんだ』

しばらくの間、沈黙がつづいた。

『俺、武の気持ち知ってた』

聞こえてきたのは和人の落ち着いた声だった。  
少し間があいて、武が半泣きで言った。

『和人、もう僕のこと嫌いだよな』

『そんなことないよ』

和人の声は焦っていた。

『別に嫌いになったりとかしないよ』

『武、良かったな』

洋助がつぶやいた。

それは洋助だけではなく、僕も直も思っていることだった。

武はまた深呼吸をしたようだった。

『良かったら付き合ってください』



## 武の章1：第六話

数週間後 …。

僕は、走って学校へ行った。

「おはようー!!」

僕は教室のドアを勢いよく開け、叫んだ。

「おはよう、弘樹。遅いぞお」

直と洋助が、武の机に集まっている。

「もしかして、待ってた？」

「一時間くらい」

直が言った。

僕は笑って言った。

「嘘つけ」

「その通り」

武がいつもの台詞でしめた。  
こうでなくちゃ。

予鈴が鳴り、僕たちは席についた。  
僕はちらっと和人の席を見た。  
やっぱり和人は学校に来ていない。

僕は前を向くと、本をだして読み始めた。

放課後。僕たちは公園へ行った。

いつものように僕と直、そして洋助はチャリ。

武は後ろを走ってついてきた。

公園に着くと、武は誰かを探した。

いつものベンチに、和人が座っていた。

「待ってたぜ、武」

武は嬉しそうに笑った。

「武、借りてくぞ」

「ご自由に」

直が笑って言った。

和人は武をチャリの後ろに乗せて、走っていった。

さらさらの金髪の背中にしがみついた武は、どこか誇らしげに見えた。

「武と和人、ラブラブだね」

僕が言った。

洋助は笑うと、

「あつたり前よ」

と言う。

和人は女の子と付き合っても良い、という条件で、武と付き合った。それを聞いたときの、武のいつもにまして高く、はしゃいだ声を僕たちは忘れないだろう。

取り残された僕たちは、アイスを買うためにブルーシールまで競走した。

武の章 1

終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3896a/>

---

夏の日友情

2010年12月14日19時01分発行